

夢 塾 だ よ り

～ 母 の 一 言 ～ (第5号)

平成 29 年 11 月 17 日



「お前には、ひとつだけいいところがある。それは文章を書いたり、話をするのが上手だから、小説家になったらいい」と言ってくれた。・・・もし、母が他の人たち一緒になって、私を叱ったり馬鹿にしていたら、私という人間はきっとグレてしまって現在どうなっていたかわからない気がする。母が私の一点だけを認めてほめ、「今は他の人たちがお前のこ

とをバカにしているけれど、やがては自分の好きなことで、人生に立ち向かえるだろう」と言ってくれたことが私にとっては強い頼りになったと言える。

これは『沈黙』などで有名な作家、遠藤周作（故人）の話です。子供にとっては「親」はいつまでも「親」、周作少年の沈みかかった心にお母さんの一言が灯を点したのです。

よく、教師は生徒を「褒めて伸ばす」と言いますが、教師以上に親は子供を褒めてあげるべきです。何でもかんでも褒めるということではなく、つぶれそうになったときであればあるほど、誰にもまねのできない一点を見つけて褒めてあげましょう。

私も教職経験の中で叱ることより褒めることを選び、たくさん褒めてきました。今でも叱ることは下手です。人を褒めるにはその人を好きにならねばなりません。嫌いな人は褒められません。褒めるには、その人をよく見ていないといけません。いいところを見つけ出すには努力も必要で、それ以上にその人に関心を持たねばなりません。ですからいいところを見つけて褒めましょう。褒められたことは、一生その人の心に残り、どんな困難にも立ち向かえる心を育てるものです。

私は褒められて育ちました。母に褒められ小学校でも先生に褒められました。そこで、三年前に他界した私の母の一言。

「いえー、けんゆう。ミーヌ イーラー クビウーリ 。チュンカイヤ チャー ヤサシク ドー」

注釈：「頭を下げて、人にはいつでも優しくね」